

書評 中前正志 『神仏靈驗譚の息吹き——身代わり説話を中心に——』

豊 島 修

本書の著者、中前正志氏はすでに中世説話を中心とする国文学の分野では、よく知られた研究者である。同氏には多くの論文のほか、展示史料の解説をほどこした図録等の執筆がある。前者については、本年一月に「丹後成相寺縁起の展開——古代から現代まで、寺内と寺外と——^①という論文で、八十八頁にわたる長文の寺院縁起研究を世に問うている。このような状況下の中で、今回、著者のはじめての研究書が世に出されたのは大変喜ばしく、この分野の研究者に与える影響が大きいことを思うのは、私一人ではあるまい。

本書は「神物靈驗譚」を取り上げているが、この「靈驗譚」については、時代をこえて「靈驗・利益がもたらされたという具体的な話」を靈驗譚と規定する（「はじめに」）。本書では主に七つの神仏靈驗譚を中心に取り上げて、その詳細な分析・検討を加え、その変容過程や背景にあるものを検討した興味深い研究書である。すでに本書は、渡浩一氏によって「書評」が述べられているが、以下では「目次」を紹介し、その内容にふれて、最後に私なりの注文を述べることにしたい。^②

まず「目次」に注目すると、本書は次の七章と付章から構成されている。

第一章 「不動の涙―崩れた靈験の証し」

第二章 「命代わり―靈験を引き出したもの」

第三章 「女の髪と地藏―進化する靈験の証し」

第四章 「轆轤の痛み―強調される靈験」

第五章 「折れる刀―靈験の一人歩き」

第六章 「矢負から矢取へ―靈験の精神的背景」

第七章 「封じられた秘術―靈験への期待と危惧」

付章 「新生守敏―西寺所蔵敏伝」

「あとがき」によれば、各章はいずれも平成八年から平成二十二年の間に発表された旧稿を増補し、さらに大幅に改稿したもので、図版も新たに加えられており、読者にとってほしいそう便宜がはかられている。しかも福題に「身代わり説話を中心に」とあるように、第四章を除くと、各論は「神仏の身代わり」の要素をもった説話であること、それを各章の副題に基づいて詳細に検討されているのが、本書の特徴である。

第一章「不動の涙―崩れた靈験の証し」は、「弟子が師の身代りになるといいう話」で、その具体例を三井寺（園城寺）の僧、智興が瀕死の重病に陥ったとき、弟子の証空が身代りになる。すると今度は証空の守り本尊、不動明王の絵像が涙を流しながら証空の身代りになるといいう、一般的には「泣き不動説話」といわれるものである。しかもこれは「二重の身代り説話」であり、「師弟間の情愛物語」であり、「不動明王の靈験譚」でもあるとされる。この説話を不動尊が「泣く場面」に焦点をあて、豊富な史料を引用・展開しながら検討し、中世には不動尊の涙が「病脳苦痛」の涙から「感

動哀憐」の涙に変質したことを考察する。さらに近世になると、本来の「病腦苦痛」の涙に戻る過程を考証している。本章は渡浩一氏も指摘しているように、「中世の靈驗譚と近世の靈驗説話」の本質的な相違を知ることができる。各時代の中で神仏靈驗譚の身代わり説話を考察するとき、このような視点と時代をこえた検討が大切な課題であることを教えてくれる。その意味から「本書の冒頭を飾るにふさわしい卓論⁽³⁾」といわれるのは、評者も賛成である。

第二章「命代わり―靈驗を引き出したもの」は、歌集『赤染衛門集』に息子の挙週が重病に陥ったとき、住吉明神に歌を奉り、息子の病氣回復を祈願する。その靈驗を得て、息子が病氣から救われたという「代はらむと祈る命は惜しからで別るとおもはん程ぞかなしき」の奉納歌（「赤染衛門住吉祈願説話」）を中心に検討している。ここでは赤染衛門住吉祈願説話の展開過程をあと付け、『古今著聞集』になると、右の奉納歌には、本来、赤染衛門が身代わりを祈願する内容があったこと。「歌徳説話としての出発↓身代わりの要素の顕在化↓恩愛説話としての展開型の派生」という変容過程を辿ることを考察する。しかもその変遷過程で、同説話が身代わりの要素を顕在化させると、その身代わりは「命代わり」として、息子を救おうとする母の心情に「神が感心した」ことを推測している。第一章と同様に、親子の恩愛がおなじような働きをしていることを論じた内容である。

第三章「女の髪と地蔵―進化する靈驗の証し」は、六波羅蜜寺の「鬘掛（かづらかけ）地蔵」の由来譚を取り上げている。説話の内容は、母が亡くなり、悲しみに暮れる娘に代わって、葬儀を営んでくれる僧が実は地蔵であったこと、しかもお札に手渡した鬘の毛を地蔵が持つていたことに注目する。そして鬘掛地蔵の靈驗譚には、地蔵の持ち物を棺の中に入れていた母の鬘とするものと、布施として僧に渡した娘の髪とする二様の伝承が行われていた。そこでまず「地蔵が手にするのを誰の髪と捉えているか」を確認し、それは「娘の髪を手にするのが本来の形」であること、その後「母の鬘を持つ形が異説として派生」してきたことを論じる。さらに説話の変容に並行して、「平安時代には、足に土が付

ただだけの、山送りの地蔵であった」ものが、中世には「娘の髪を手に巻き付けた鬘巻地蔵へと変化」し、その変化は「清水寺観音の靈験譚の影響下に起こった」ことも検証している。「靈験の証しとしてのモノと靈験説話」の深い関係を知ることができる論である。

第四章「髑髏の痛み―強調される靈験」は、三十三間堂創設説話の伝承と成立・展開に関わる論考である。『吉口伝』によれば、頭痛に悩んでいた後白河院が、その原因を紀伊熊野に行幸したおり、本宮証誠殿で熊野権現から夢告（託宣）を受けた。それは院の前世が蓮華坊という行者で、熊野から帰京する途中に、古道の中辺路にある滝尻で他界したので、前生の遺骨を得て帰京し、北法華堂に安置すると共に蓮華王院（三十三間堂を創建したという内容である。この説は近世以降になると、高汎に伝承・流布されたことを、「浄瑠璃」の影響の基に「昔話化・伝説化」したことを確認する。そして因幡堂の関与に注目し、因幡堂が三十三間堂創建説話に入り込むことで、同寺の靈験を強調し、それを同寺の縁起に取り込んだという。一種の権威付けの材料にしたことを明確にしている。修験道文学などの寺社縁起研究における「物語的縁起」研究⁴の一面を窺う上からも大変興味深い。

第五章「折れる刀―靈験の一人歩き」は、宗派を超え、『観音経』の例証話として広く伝承された盛久説話の研究である。本説話は後世まで多くの作品に採録されているが、その内容や記述は様々ではないという。そこでその描かれ方や変遷の様相を史料から検討する。次に日蓮の龍口法難伝承を取り上げ、盛久の話と類似する要素が、刀の折れる靈験のほかにも加わっていることを論じる。そしてそれらの話の相違点に注目して、「劇的で印象的な刀尋段段壊」が一人歩きしたことを指摘する。それは類似の処刑を免れる「刀の折れるモチーフ」が取りこまれたことがあったからであるという。靈験説話の変容・展開を論じることによって、経文の影響や注釈の問題に絡むことを想定させる重厚な論文である。さらにキリシタン文献にも眼を通してマリアの靈験譚を提示し、「慈悲譚」との共通性を述べて、靈験主体に

共通する性格が、類似の靈驗譚を生み出すことまで主張している。「著者の視野の広さ」⁵⁾を窺うことができる論である。

第六章「矢負から矢取へ―靈驗の精神的背景」は、京都市南区羅城門町にある羅城門遺跡の近くに祀られる矢取地蔵の靈驗譚についてである。西寺の守敏と空海との話で、「雨乞いに敗れた守敏が放った矢を、地蔵が身代わりになって空海を救ったという地蔵の身代り靈驗譚を指す。この矢取地蔵靈驗譚を時代を遡って探索し、種々の変容・展開があったことを考証する。そして矢取地蔵の靈驗譚が誕生したのは、「呪詛対決譚における空海を正当化し浄化」しようとする志向が精神的背景にあったことを推測する。さらに幕末期以降にはこの話が『弘法大師絵伝』に取りこまれ、改変矢取地蔵靈驗譚が契機となり、「矢負」から「矢取」への呼称の変化が起こったことなどを論じる。「宗祖を正当化する教団側の意志が、民間に生まれた靈驗譚を変容させた」⁶⁾一例として興味深い。

第七章「封じられた秘術―靈驗への期待と危惧」は、金光教において、神の加護である「おかげ話」によって、「病氣などの危難から奇跡的に救われたという内容を一つの典型」とするが、それを靈驗譚・利益譚と把握することをふまえて、「おかげ話」のなかに「身代わり靈驗譚」が見出されることを諸史料から抽出する。それは第二章で取り扱った赤染衛門住吉祈願説話と同様の機能をもつことを指摘し、秘術「お持替」、つまり身代わりを志願した人物に病気を移し替えるのと同じ術法であったことを論じる。そして「淫祀邪教と見做されたりすることへの危惧」が存在した教団は、近代宗教として生きるために「おかげ話」を規制せんとし、そのため「靈驗説話も変容していく様子」が窺えたとされる。評者は新宗教の近代における靈驗譚が、国文学研究の対象とされているのかどうかについては門外漢であり、よく知らないが、このような研究が可能であれば「説話研究の可能性」⁷⁾を認めないわけにはいかないだろう。著者の説話研究が前近代のみならず、近代以降の靈驗譚にも眼を向けている点に注目したいと思う。

付章「新生守敏―西寺所蔵守敏伝」は、第六章で取り上げた守敏伝説話を補強する内容を持っている。まず弟子の

敏教が筆録した守敏伝『守敏僧都一代行状縁起』と、同じ西寺所蔵の内題『西寺開祖守敏大僧都略縁起』を翻刻・紹介し、第六章で取りあげた矢取地蔵(矢負地蔵)の流布を契機として、守敏側でも守敏の正当化、淨化が図られていたことを論じている。新出史料をふまえて新しい知見が述べられているのは興味深い。

以上、本書に収められた諸論文の内容を簡略に紹介したが、全体を通して研究史をしっかりと把握していること、そこから見出される問題点を諸史(資)料の精密な分析から検討をおこなっており、指摘される論点には納得させられることが多い。しかも使用される諸史(資)料は文学史料のみにとどまらず、絵画史料や民俗学の文献史料にも眼をくぼり、考察対象の時代も古代から中世、近世におよび、さらに近現代の問題にまで視野を拡げているのは、とにかく圧巻である。それは日本史研究や日本宗教民俗学(日本仏教民俗学)研究に通じる「寺社縁起」研究の変遷とその背後にあるものまで、たえず注意をはらっているからであろう。控え目な記述と文章の表現は、日々、大学で接している者が感じ取っている人柄を偲ばせるに充分である。

それだけに私も全体を通して「総論」としての「息吹き論」が必要であったと思われる。「はしがき」がそれを示しているのかも知れないが、それだけでは著者の意図を十分にくみ取ることはできない。各章の副論が「寺社靈験譚の息吹き」を分析する視点であるので、それとの関わりを示す上からも是非とも必要な作業であったろう。「神仏靈験譚が時代を越えて生き続ける」ことを追求することは大変重要な課題であるが、そのためにも神仏靈験譚が古代から中世へ、さらには近世・近代以降まで継続していく「変容過程と時代的特質」を明らかにしなければならぬのである。⁽⁹⁾この点については次回に是非ともお願いしたいものである。

註

- (1) 京都女子大学国文学会編『女子大國文』第百五十号所収、平成二十四年一月発行。
- (2) 説話文学会編『説話文学研究』第四十七号、平成二十四年七月三十日発行。
- (3) 註(2) 参照。
- (4) 修験道文学の寺社縁起研究における「物語的縁起」については、五来重「総説 修験道文学について」『修験道美術・芸能・文学(Ⅱ)』所収、「山岳宗教史研究叢書」⑮、名著出版、一九八一年、同「寺社縁起の世界」『寺社縁起と伝承文化』所収、『五来重著作集』第四卷、法藏館、二〇〇八年参照。
- (5)、(6)、(7)、(8)、(9) 註(2) 参照。

(本学教授)